

中国文言系説話における 「もの言う動物」について

——『太平広記』を中心に——

小 山 瞳

はじめに——動物昔話における「もの言う動物」について

動物が登場する昔話——動物昔話¹⁾では、動物が、ものを言うことがある。それは中国で20世紀に採集された動物昔話にもみられる。たとえば、中国のさまざまな地域で語られる「古屋の漏り²⁾」において、虎と猿が次のようにものを言う（下線は引用者による。以下同じ）。

老虎生怕锅漏再撵上来、赶紧往山里逃。进上碰见个猴子、老虎说「傻瓜、快走、快走、山下来个锅漏。拴住你脖子当马骑、骑上狠用鞭子抽。这家伙还会往树上飞、真厉害。快逃命吧。」猴子不信、对老虎说「那只怕是人吧。走、咱在瞧瞧。要是人、你把他吃了。」老虎摇摇头「算了、算了、好不容易逃了条命、再回去送死吗。」猴子很好奇、一心想见见锅漏到底是啥怪物、独个又不敢去、就骗老虎说「虎大哥、听你

1) ウラジーミル・プロップは、「動物昔話」について「動物が物語の主要な客体ないしは主体になっている昔話であると了解されよう」（ウラジーミル・プロップ著・斎藤君子訳『ロシア昔話』（せりか書房、1986年）304頁下段）とのべる。

2) 「古屋の漏り」については立石展大『日中民間説話の比較研究』（汲古書院、2013年）第三章「「古屋の漏り」の比較研究」を参照。このタイプの昔話は中国では「鍋漏」（青海省ほか）「老虎怕鍋漏」（河南省ほか）「漏」（河北省ほか）「猴子和老虎」（吉林省ほか）などと呼ばれるが、ここでは同書に従い、このように称す。なお、本論文で引用した原典について、「:」、「!」、「?」は「。」または「、」に統一した。また句読点については、一部、従わなかった箇所がある。

说的那个样子、锅漏八成是我们猴族里的一员、黑夜里没认出是你、才那样胡来。快领我去见见、我一说你的厉害、准叫锅漏给你赔礼道歉。」
老虎点点头说「嗯、也许是个误会。跟我来吧。」说着就领猴子往山下走³⁾。

虎は「鍋漏」（鍋が漏る）がまた追いかけて来るのではないかと思つて、大急ぎで山へ逃げた。山を登ると、猿に出会つたので、虎が言つた。「ばか、早く行け、早く行け、山から「鍋漏」が来るぞ。おまえさんの首を縛りつけて馬に乗って、馬のうえから鞭でたたく。こいつはそのうえ木から飛び移ることもできる、ほんとにおそろしいやつだ。とつとと逃げたほうがいい。」猿は虎のことばを信じることなく、虎に言つた。「まさかそれは人間じゃないのかね。行って、いっしょに見に行こうや。もし人間だったら、おまえがそいつを食べればいい。」虎は首を振つて言つた。「もういい、もういい。いくら命があつたつて逃げられりゃしない、またおれを行かせて死なせようっていうのか。」猿は好奇心から、ただ「鍋漏」というものが一体どんな怪物なのかを見たいと思つた。けれども自分だけで行くのは勇気がないので、そこで虎をだまして言つた。「虎のあにき、おまえさんのその様子を見ると、「鍋漏」っていうのはたぶんおれたち猿族の仲間のように思う。夜の暗闇のなかでおまえさんが（虎だということを）わからなかったんじゃないか、だからそんな勝手放題にしたんじゃないか。とつとおれを連れてつて見せてくれ。おれが思うに、おまえさんのおそろしさには、きっと「鍋漏」もおまえさんに謝ると思う。」虎はうなずいて言つた。「うん、たぶんきっとおれが見誤つたのだろう。おれについて来いよ。」そう言つて、猿を連れて山を下りて行つた。

このとき、虎と猿はことばを用いてやりとりをしているが、現実世界で

3) 「老虎怕鍋漏」（虎は鍋が漏るのがこわい）（洛陽市・1983年採録）、中国民間故事集成河南卷編輯委員会『中国民間故事集成・河南卷』（中国 ISBN 中心、2001年）374頁。

は、虎と猿が会話をすることはありえない。また、虎と猿を一緒にすれば、猿は虎に捕食される可能性もあるだろう。ところが、動物昔話においては、動物がことばを話すことで驚かれることはなく、また、種族の異なる動物同士が会話をすることも驚きの対象とはならない⁴⁾。

1. 『太平広記』にみえる「もの言う動物」

虎が猿と会話をしたり、虎が猿を連れて歩いたりするような、動物を擬人化させた説話は中国中古の文言系動物説話には見られない。以前、小山「『太平広記』における「もの言う動物」に関する一考察」⁵⁾において、『太平広記』から「もの言う動物」の例を抽出したことがあるが、ここでは視点を転じ、それらの「もの言う動物」の例について再考したい。

ことばを発した動物の話や動物同士の会話の例は18例あり、次のようなものがある。

(表) 『太平広記』における「もの言う動物」

	卷数「題名」(出所)	動物の種類	動物がものを言う状況
1	卷一〇九「釈智聡」(出『唐高僧伝』)	虎	虎が僧侶の呼びかけに答える
2	卷三一「張偃」(出『聞奇録』)	虎	虎が神に不平をのべる
3	卷四二八「劉薦」(出『広異記』)	山魃	山魃が虎に命じて人を襲う
4	卷四二八「斑子」(出『広異記』)	山魃	山魃が虎に命じて人を襲う
5	卷四三〇「婦生」(出『聞奇録』)	虎	虎同士で会話をする
6	卷四三九「都末」(出張璠『漢紀』)	野豕	野豕が人間に話しかける
7	卷四四〇「王周南」(出『幽明録』)	鼠	鼠が人間に話しかける

- 4) 昔話において動物がものを言っても驚きの対象とならないことについては小澤俊夫『昔話のコスモロジー ひとと動物との婚姻譚』(講談社、1994年) 32-33頁を参照。なお、同書では、伝説において動物がものを言うことについては、「こうして人間の前に現れて、人間と同じことばをしゃべれば、そのこと自体に伝説としての興味が向き、そのこと自体が、伝説が伝えるべき奇跡的事件となるはずである」とのべる。

- 5) 関西大学大学院文学研究科『千里山文学論集』第101号、2021年所収。

中国文言系説話における「もの言う動物」について

8	卷四四〇「終祚」(出『幽明録』)	鼠	鼠が人間に話しかける
9	卷四四〇「天寶驍騎」(出『広異記』)	鼠	長寿の鼠が陳述する
10	卷四四一「蔣武」(出『伝奇』)	猩猩	猩猩が象の話を人に話す
11	卷四四一「蕭志忠」(出『玄怪録』)	虎、麋など	動物が神人に願望をのべる
12	卷四四六「能言」(出『朝野僉載』)	猩猩	猩猩がことばを発する
13	卷四六〇「張華」(出『異苑』)	鸚鵡	鸚鵡が予知をする
14	卷四六〇「鸚鵡救火」(出『異苑』)	鸚鵡	鸚鵡が天神の呼びかけに答える
15	卷四六〇「雪衣女」(出『譚賓録』)	鸚鵡	鸚鵡が予知をする
16	卷四六〇「劉潜女」(出『大唐奇事』)	鸚鵡	鸚鵡が予知をする
17	卷四六七「子英春」(出『神異記』)	鯉	魚が話しかける
18	卷四六八「永康人」(出『異苑』)	亀	亀が話し出す／亀が桑樹と会話をする

※動物が直接話法でものを言う例に限った。また、動物が人間に変身してものを言う・人間が動物に変身してものを言う、夢のなかで動物がものを言う例は省いた。ただし、山魃や猩猩など伝説上の動物や、鸚鵡のように実際にものを言うことのできる動物の例は比較のために含めた。

ものを言う動物の種類としては、虎および鸚鵡が4例、鼠が3例、猩猩が2例、山魃が2例、野豕、麋、鯉、亀がそれぞれ1例ずつとなっている。山魃や猩猩のような伝説上の動物や、実際にものを言うことのできる鸚鵡などの動物の例も少なくない。

また、動物がものを言う状況としては、動物同士の会話例もあるが、人間に話かける・天神や山魃など、超自然的存在と人間が話す例もある。

このように、『太平広記』所収の動物説話にも、動物がものを言う説話は存在する。例として、『太平広記』⁶⁾卷四六八「永康人」(出『異苑』)をあげる。

吳孫權時、永康有人入山遇一大龜、即逐之。龜便言曰「遊不良時、爲君所得。」人甚怪之、載出、欲上吳王。夜泊越里、纜舡於大桑樹。宵中、樹呼龜曰「勞乎元緒、奚事爾耶。」龜曰「我被拘繫、方見烹臠。」

6) 汪紹楹校勘『太平広記』(中華書局、初版1961年、ただし参照したのは1981年印刷のもの)に拠る。また、句読点については底本に従わなかった箇所もある(以下、同じ)。

雖盡南山之樵、不能潰我。」樹曰「諸葛元遜博識、必致相苦。令求如我之徒、計從安出。」龜曰「子明、無多辭、禍將及爾。」樹寂而止。既至、權命煮之。焚柴百車、語猶如故。諸葛恪曰「然以老桑方熟。」獻之人仍説龜樹共言、權登使伐取。煮龜立爛。今烹龜猶多用桑薪、野人故呼龜爲元緒也。

呉の孫権の時、永康の人が山で一匹の大きな亀に出くわし、これを追い払おうとした。すると、亀が「泳げなかったのも、お前に捕まえられたのだ」と言った。その人はたいそう奇怪に思い、亀を載せて、呉王に献上することにした。夜、亀を乗せた船が越の村に停泊することになり、大きな桑の樹木に船がつながれた。夜中、樹木が亀に呼びかけた。「元緒さん、これはご苦労さまです。あなたはどうしたのですか」亀が言う。「私は捕まえられて、今にも煮られようとしているのです。ですが、南山の樹木をすべて伐り倒して、私をその木で煮たとしても、私を煮て食べることはできないでしょう。」

樹木が言う「諸葛元遜（諸葛恪）は博識ですから、きっと苦しめられることになるでしょう。たとえ私のような者でも、どうしたって災難に遭わないようにはできません。」

亀が言う「子明さん、口をつつしみなさい、災いがあなたにも及ぶでしょう」すると樹木は口を閉ざしてしゃべらなくなった。永康の人が亀を孫権のもとに献上すると、孫権は亀を煮るように命じた。車百台分の柴を使って煮たが、もとのようにことばを話した。諸葛恪が言った、「年老いた桑の木なら亀を煮ることができます。」亀を献上した人から、亀と桑の木が話をしていたと聞いた孫権は、桑の木を伐採させて、その木を薪にして亀を煮ると、亀はすっかり煮えた。だから今でも亀を煮るのに多くの桑の薪を使い、地元の人々は亀を「元緒」とよぶのだ。

この亀は、人間にも話かけ、桑とも話をする。原文に「人甚怪之、載出、欲上呉王。」とあることからわかるように、本話では亀がものを言うこと

が驚きの対象となっている。

この話は、多言を戒める教訓譚ともいえるが、末尾部分を見ると、亀が現地で「元緒」と呼ばれることの由来譚とも言えるだろう。その点を踏まえ、民話由来の説話のようにも思われるが、上掲の動物昔話「古屋の漏り」とは異なり、ここでは亀および桑がものを言うことが怪異として受け止められている点に注目したい。

このほか、『太平広記』巻四四〇「王周南」（出『幽明録』）にも「もの言う動物」の例がある。

魏齊王芳時、中山有王周南者爲襄邑長。忽有鼠從穴出語曰「周南爾以某日死。」周南不應。至期、更冠幘皂衣而出曰「周南爾以日中死。」亦不應。鼠復入穴、日適中、鼠又冠幘而出曰「周南汝不應、我何道。」言絕、顛蹶而死、即失衣冠所在。就視之、與常鼠無異。

魏齊王の芳の時、中山に王周南という者がいて襄邑の長となった。鼠が穴から出てきて言った、「周南よ、お前は某日に死ぬぞ。」周南は何も言わなかった。予告した日になって、今度は頭巾をかぶり、黒い服を着て、鼠が出てきて言った、「周南よ、お前は今日の正午に死ぬぞ。」それでも、周南は何も言わなかった。鼠はまた穴に入った。ちょうど正午になり、鼠はまた頭巾をかぶって出てきて言った、「周南よ、お前が相手にしなければ、私はどうすればいいのだ。」言い終わると、倒れて死んだ。たちまち鼠の服と冠は消失した。近くに行つて、これを見たが、普通の鼠と何ら変わったところはなかった。

鼠が人間のもとにやって来て、その人物が近いうちに死ぬことを予言する。だが、王周南は鼠のことばに耳を貸さず、一言も言わずにいと、鼠が倒れて死ぬ。鼠は服を着たり、帽子をかぶったりするが、服や帽子は鼠が死ぬとともに消失する。結末に至るまで、鼠の正体は明らかにされず、なぜ鼠の予言が当たらなかったのかも不明である。

「王周南」とほぼ同じ説話は、南朝宋・沈約『宋書』⁷⁾巻三十四・五行志

7) 『宋書』（中華書局、1974年）に拠る。

「黄眚黄祥」にも載り（唐・房玄齡『晋書』⁸⁾卷二十九・五行志「黄眚黄祥」もほぼ同じ）、そこではこの一件について次のように説明される。

案班固説、此黄祥也。是時、曹爽専政、競爲比周、故鼠作變也。

班固の説によると、これは「黄祥」である。この時、曹爽が専政を行い、競って周を比べようとしたために、鼠が変を起こしたのだ。

魏の権臣・曹爽による専制が鼠の怪異——鼠が服を着てものを言うこと——と関係することを言う。

このように五行志においては、動物がものを言うことと、政変などの国家の事件が結びつけて説明される⁹⁾。それが、『太平広記』「王周南」では怪異が起きた理由を突き止める五行志的記載が削除され、鼠が人語を話すという怪異の記録となっている。

また、実際にものを言うことのできる鸚鵡の場合、『太平広記』卷四六〇「鸚鵡救火」（出『異苑』）のような説話もある。

有鸚鵡飛集他山、山中禽獸輒相貴重。鸚鵡自念、雖樂不可久也、便去。後數日、山中大火。鸚鵡遙見、便入水濡羽、飛而灑之。天神言「汝雖有志、何足云也。」對曰「雖知不能、然嘗僑居是山。禽獸行善、皆爲兄弟。不忍見耳。」天神嘉感、即爲滅火。

よその山に飛んで行った鸚鵡がいて、山のなかの鳥や獣たちに大事された。鸚鵡は自ら、ここは楽しいけれどもずっとはいられない、と思い、山を去った。それから数日後、山のなかで大きな火災があった。鸚鵡は遠くからそれを見ていたが、すぐに水に入って羽を濡らし、飛んで行って、火の上からかけた。天神がそれを見て言った。「お前には火を消そうとする意志はあるけども、そんなことではどうにもならない。」鸚鵡が答えて言った。「できないことはわかっていますが、かつてこの山で仮住まいをしていたのです。鳥や獣の行いはよく、みな

8) 『晋書』（中華書局、1974年）に拠る。

9) 五行志的記述と志怪における記述の相違点については佐野誠子『怪を志す』（名古屋大学出版会、2020年）69-76頁参照。

兄弟です。だまって見ていられますか。」天神は鸚鵡の思いに感動され、すぐに火は消された。

天神が、山火事を消そうとする鸚鵡に話しかけると、鸚鵡が答える。ここでは、鸚鵡がものを言ったことよりも、鸚鵡の心意気が山火事を止めたことが主題となっていて、動物昔話同様、動物がものを言うことが驚きの対象とはなっていない。鸚鵡がものを言うことについては、『礼記』¹⁰⁾曲礼上に「鸚鵡能言、不離飛鳥」とあることから、当時の人々の間では当たり前のこととして認識されていただろう。そのため、当時の人々の間で、鸚鵡がものを言うことについては、違和感なく受け入れられたのではないだろうか。

なお、本話と同様の内容は『旧雜譬喻經』卷一などの漢訳仏典にも記載がある。またジャータカ35「鵲本生譚」¹¹⁾にも山火事をとめた鵲の説話があり、「鸚鵡救火」との関連が指摘される¹²⁾。本生経を中心とする中国説話のなかに、ジャータカなど、インド由来の民間伝承的要素が含まれることについては季羨林によって指摘され¹³⁾、「鸚鵡救火」についても動物昔話等の民間伝承に着想を得たと考えられる。これが文言系動物説話として筆録され得たのは、ものを言うことができる鸚鵡が主人公であったからであろう。

「永康人」および「王周南」では、ものを言わないとされている動物（亀および鼠）がものを言った。これらの説話は超自然的現象や怪異について記録したものであり、志怪である。

上掲の「古屋の漏り」における虎や猿のように、動物が人間のようにものを言う・連れ立って歩く。こうした動物の擬人化は志怪にはみえない。このことについて、前野直彬『中国古典文学大系24 六朝・唐・宋小

10) 王鐸点校『礼記注』（中華書局、2021年）に拠る。

11) 藤田宏達訳『ジャータカ全集 1』（春秋社、1984年）「35ウズラ前生物語」241-244頁。

12) 梁麗玲『漢訳仏典動物故事之研究』（文津出版社、2010年）362頁

13) 『季羨林文集 第八卷 比較文学与民間文学』（江西教育出版社、1996年）270頁。

説選』解説に次のようにある。

サルとカニが喧嘩をしたとか、ウサギがタヌキを殺して仇を討ったなどという話は、志怪小説の中にはきわめて稀である。この種の話が中国になかったわけではないことは、現代中国の民俗学的調査の中にそれが報告されていることから確認できる。現代でも語られているくらいだから、昔はもっと多かったであろう。しかし、猿が人に化けて何かをするのならよいが、猿のまま擬人化して行動させるほどの「荒唐無稽」は、いくら奇怪が売りものの志怪小説でも、許容することはできなかったに相違ない¹⁴⁾。

「サルとカニが喧嘩をした」や「ウサギがタヌキを殺して仇を討った」というのは、前者がいわゆる「猿蟹合戦」をさし、後者はいわゆる「勝々山」を指す。どちらも動物昔話にあたり、こうした動物昔話が20世紀になって採集されたことは上述の通りである。

前野論考にもあるように、志怪は怪異を記録したものでありながらも、動物を動物のまま「擬人化して行動させ」るものはなかった。そして、そのことは、「古屋の漏り」のような動物昔話がただちにそのまま志怪の題材となったわけではないことを示している。

この傾向は、伝奇が隆盛を極めた中唐以降にいたっても続く。たとえば、唐代になると、猩猩がものを言う例が散見するが、猩猩がものを言う卷四四一「蔣武」（出『伝奇』）には次のようにある。

宝曆中、有蔣武者、循州河源人也。魁梧偉壯、胆氣豪勇、独処山巖、唯求獵射而已。善於礮張。每賣弓挾矢。遇熊羆虎豹、靡不応弦而斃。剖視其鏃、皆一一貫心焉。忽有物叩門、甚急速。武隔扉而窺之、見一猩猩跨白象。武知猩猩能言、而詰曰「与象叩吾門何也。」猩猩曰「象有難、知我能言、故負吾而相投耳。」武曰「汝有何苦。請話其由。」猩猩曰「此山南二百余里。有嵌空之大巖穴、中有巴蛇、長数百尺、電光

14) 前野直彬『六朝・唐・宋小説選』（中国古典文学大系24）解説459頁。

而閃其目。劒刃而利其牙。象之經過、咸被吞噬。遭者数百、無計避匿。今知山客善射、願持毒矢而射之。除得此患。衆各思報恩矣。」其象乃跪地、灑涕如雨。猩猩曰「山客若許行、便請挾矢而登。」武感其言、以毒淬矢而登。果見双目、在其巖下、光射数百步。猩猩曰「此是蛇目也。」武怒、蹶張端矢、一発而中其目。象乃負而奔避、俄若穴中雷吼、蛇躍出蜿蜒、或掖或踴、數里之内、林木草芥如焚、至暝蛇殞。乃窺穴側、象骨与牙、其積如山。於是有十象、以長鼻各捲其紅牙一枝、跪献於武。武受之、猩猩亦辞而去。遂以前象負其牙而帰、武乃大有資産。蔣武という獵師がいて、矢を射るのに優れていた。ある日、蔣武の家に、白い象にまたがった猩猩が来た。武は猩猩がことばを話せるのを知っていたので、猩猩に聞くと、答えて言った。象は山に大きな岩穴に数百尺の巴蛇というのがいて、象がみな吞まれてしまい、かといって逃げることもできずにいる。そこで、矢の達人である蔣武に蛇を射殺して欲しい。象は猩猩がことばを話せるのを知っていたので、猩猩とともにここに来たのだ、と。象は猩猩を通じて状況を説明すると、ひざまずいて雨のような涙を流した。武が蛇を倒しに行くことにすると、猩猩が矢を持っていくように言うので、毒矢を携えた。蛇のいる岩穴に着くと、数百歩にわたって光が放たれていた。猩猩がこれは蛇の目であることを言うと、武は怒ってその目に矢を放つと、蛇は岩穴を飛び出し、しばらくすると倒れた。岩穴には死んだ象骨や象牙が山のようにあり、武はそれらの象牙と象からもらった赤い象牙を受け取ると、猩猩もその場を立ち去った。その後、武は裕福になった。(大意)

下線部にあるように、主人公は猩猩がものを言うことを知っていた。そのため、猩猩がものを言っても驚かない。上掲の動物昔話「古屋の漏り」のように、なんの前提条件なしに動物がものを言っているわけではない。

猩猩については、『礼記』曲礼上に「猩猩能言、不離禽獸（猩猩はものを言うことができるが、禽獸から離れない）」とあり、鸚鵡とともに「も

の言う動物」として説明される。

『太平広記』所収の文言系動物説話において、動物がものを言う場合、ものを言うことができる動物（鸚鵡や猩猩など）がものを言う、あるいは超自然的存在（天神や山魃など）がものを言う場合に限られる。動物がものを言うことは怪異とされ、動物昔話のように自由に動物がものを言う例は限られている。

3. 寓言および漢訳仏典における「もの言う動物」

これまで述べてきたように、中国文言系動物説話における「もの言う動物」と、動物昔話における「もの言う動物」は性質を異にする。ただし、文言系動物説話のなかに「もの言う動物」の例がまったくなかったわけではない。そのことは、先秦の寓言や漢訳仏典をみればわかる。

まずは寓言における「もの言う動物」の例をあげよう。『戦国策』¹⁵⁾楚策所収のいわゆる「虎の威を借る狐」から、会話の場面をあげる。それは、楚王の質問に臣下の江一が答える場面にみえる。

……江一對曰「虎求百獸而食之、得狐。狐曰『子無敢食我也。天帝使我長百獸、今子食我、是逆天帝命也。子以我爲不信、吾爲子先行、子隨我後、觀百獸之見我而敢不走乎。』虎以爲然、故遂與之行。獸見之皆走。虎不知獸畏己而走也、以爲畏狐也。」……

……江一が答えて言った。「虎は、あらゆる動物を求めて食べるなか、狐を捕まえました。狐が申します。『あなたは、私を食べてはいけません。天帝は、私をすべての動物の長に命じられました。今、あなたが私を食べれば、天帝の命にそむくことになります。あなたがもし信じられないと思うのなら、私があなたの前に立って歩きましょう。あなたは私の後からついて来て、私を見て逃げだそうとする動物がいなかどうか、見てみるがよろしいでしょう。』虎はいかにもと思いま

15) 『戦国策』（上海古籍出版社、1985年）。

したので、狐と一緒に出かけました。動物たちはこれを見て、みな逃げ出しました。虎は、動物たちが自分をおそれて逃げているのだとは気が付かずに、狐を遅れているものだと思い込んだのです。」……

ある人物の会話のなかに、狐と虎の会話が登場するという、いわば劇中劇的構造である。このように、寓言のなかに、種を異にする動物同士が会話をする例はほかにもある。『莊子』¹⁶⁾外物篇にある、いわゆる「轍鮒の急」である。

周こと、莊子は家が貧しく、食べるのに困っていたので、監河侯のもとに食べ物を借りに行く。しかし、監河侯からは先送りにするを言われ、莊子は次のようなたとえ話をする。

……周顧視、車轍中有鮒魚焉。周問之曰『鮒魚來、子何爲者邪。』對曰『我東海之波臣也。君豈有斗升之水而活我哉。』周曰『諾。我且南遊吳越之王、激西江之水而迎子、可乎。』鮒魚忿然作色曰『吾失我常與、我無所處。吾得斗升之水然活耳。君乃言此。曾不如早索我於枯魚之肆。』

……振り返ってみますと、車の轍の水たまりに一匹の鮒魚がおりました。『おや鮒魚か、一体何をしているのだね。』と問いかけますと、『わしは東海の波間に浮かぶ海神の臣下である。ついては、そなた一斗か一升の水で結構、持ってきてわしを活かしては下さらぬか。』という返事。そこで私は言ってやりました。『承知した。いずれ南方の呉・越の王の下に旅をするつもりだから、向こうに着いたら長江の支流（蜀水）の水をばしゃとしぶきを揚げるほどふんだんに抱えて、君を迎えに来ることにしよう。それでどうだね。』すると鮒魚はむっと気色ばんで、こう言ったのでした。『わしは欠かせぬ相棒の水を失ってしまって、身の置き場もないところである。ここに一斗か一升の水さえあれば、それで早活きられように、そなたは何とさような戯言を

16) 劉文典撰、趙鋒・諸偉奇点校『莊子補正』（中華書局、2015年）に拠る。

仰られる。いっそさっさと乾物屋にでも行ってわしを探すがましというものであろう。』¹⁷⁾

莊子が轍にできた水たまりにいる鮒と会話をする。なお、先秦・唐の寓言のなかで動物と人間が直接会話をする例はほとんどなく、この一例のみである¹⁸⁾。

そのほか、動物と人間の直接会話の例ではジャータカ文献を漢訳した『六度集経』¹⁹⁾卷三の「鹿王捨身代懷孕母鹿受死」がある。全文をあげるのは長いので、先に梗概を示した上で、動物がものを言う場面のみ原文と訳文をあげる。

かつて菩薩が七色に光る鹿の王であったときに、人の国を治めていた王は鹿を狩るのが好きで、たくさんの鹿が殺された。そこで、鹿の王は鹿たちがむごい殺され方をされることがなくなるように、と思い、人の王のもとに赴いて、次のように言った。

乃到殿前、跪而云曰「小畜貪生、寄命国界。……願自相選、日供太官、乞知其數、不敢欺王。」王甚奇曰「太官所用日不過一、不知汝等傷死甚多。若実如云、吾誓不獵。」鹿王退還、悉命群鹿、具以斯意示其禍福。群鹿伏聽、自相差次。……中有応行者而身重胎、曰「死不敢避、乞須俟娠。」更取其次、欲以代之。

(鹿の王は) 人の王の御殿の前でひざまついて次のように言った、「わ

17) 訳出するにあたっては、池田友久『莊子(下)全訳注』(講談社、2014年) 633-634頁を参考にした。

18) 渡辺志津夫「唐代の動物寓話——中国寓話史における韓愈の再評価——」(広島大学文学部中国中世文学研究会『中国中世文学研究』第59号、2011年) 43頁。また、高芝麻子「「漁夫の利」の動物たちはなぜしゃべるのか——『戦国策』に見える擬人法——」(古典教育デザイン研究会『古典教育デザイン』第3号、2017年) 56頁・注13)に「儒家では、孔子「不語怪力乱心」(『論語』述而篇)などの主張を受け、非現実的なことを否定する傾向が強く、動物を擬人化する表現は原則としてみられない。」とある。儒家思想が国教となる漢・武帝以降、寓言においても「もの言う動物」の例がみられなくなる。

19) CBETA (T3, no. 152, p. 12c7-19)、2022年10月25日閲覧。

たくしは生をむさぼり、この身を王さまのお国にいたらしめたのです。……どうか、我々鹿の群れのなかから犠牲となる者を、自分たちで選ばさせていただき、犠牲になることが決まった者が、王さまの料理人にその身を順番に提供いたすこととします。王さまを偽ったりはいたしません。」人の王はたいそう奇怪に思って次のように言った。「料理人が用いる鹿の数は一頭だけにとどまらず、お前たちがそれほど多く傷ついていたとは知らなかった。もし本当にそうであれば、私は誓って鹿狩りはしない」。鹿の王は鹿の群れに帰ると、鹿たちに言った。人の王に日ごと一頭ずつその身を提供し、誰が犠牲となるかは順番で決める、と。鹿たちは伏してそれを聞き、その通りにした。……そのうち身重の雌鹿に順番がめぐって来た。雌鹿は「死ぬことを避けることはできませんが、どうか子を産むまでお待ちください」と言った。そこで、鹿王はその次の順番にあたる鹿を犠牲とすることにして、その雌鹿に替えることにした。

また、漢訳仏典のなかにも、動物同士の会話の例がある。『生経』²⁰⁾ 卷一「仏説野鷄經第六」である。

……於時野猫心懷毒害、欲危鷄命、徐徐来前在於樹下、以柔軟辞而説頌曰「意寂相異殊、食魚若好服。從樹来下地、当爲汝作妻。」於時野鷄以偈報曰「仁者有四脚、我身有兩足。計鳥与野猫、不宜爲夫妻。」

……

このとき、野猫は邪惡な気持ちを懷き、鷄に危害を与えようとして、おもむろに鷄のいる樹の下に来て、やわらかな口調で頌を唱えた。「心は寂しく、わたしたちはおたがいに姿を異にしますが、魚を食べるのは服を好むのと似たようなものです。どうぞ木からお降りくださいな、わたくしはあなたの妻になりますわ。」野鷄は偈で次のように返した。「あなたは四つ脚ですが、わたくしは二足。思うに、鳥と野

20) CBETA (T03, no. 154, p. 74a13-17)、2022年10月25日閲覧。

猫が夫婦となるのはよいことではありません。』²¹⁾

はじめ野猫のほうから話しかけるが、そのときは頌を歌う。それに対して、野鶏は野猫の誘いを偈によって断る。偈も頌も同じものであり、仏の教を詩句の体裁で述べたものである²²⁾。

このほか、『続高僧伝』²³⁾ 卷二十所収の釈智聰の伝に虎がものを言う場面がある。

釋智聰。未詳何人。昔住楊都白馬寺。後住止觀專聽三論。陳平後度江住楊州安樂寺。大業既崩思歸無計。隱江荻中誦法華經七日饑。恆有四虎遶之而已。不食已來經今十日。聰曰「吾命須臾、卿須可食。」虎曰「造天立地無有此理。忽有一翁年可八十。」掖下挾船曰「師欲度江栖霞住者、可即上船。」四虎一時目中淚出。聰曰「救危拔難正在今日可迎四虎。」於是利涉往達南岸。船及老人不知何在。聰領四虎同至栖霞舍利塔西。經行坐禪誓不寢臥。眾徒八十咸不出院。若有凶事一虎入寺大聲告眾。由此驚悟每以爲式。聰以山林幽遠糧粒艱阻。乃合率楊州三百清信以爲米社人別一石年一送之。由此山糧供給。道俗乃至禽獸通皆濟給。至貞觀二十二年四月八日。小食訖往止觀寺。禮大師影像執鑪遍禮。又往興皇墓所禮拜。還歸本房安坐而卒。異香充溢。丹陽一郭受戒道俗三千餘人、奔走山服哀慟林野。時年九十九矣。

釈智聰という僧侶がいて、長江を渡って安樂寺に行こうとしたが、長江を渡ることができずにいた。そこで、長江の葦のなかに隠れて法華經を唱え、七日間なにも食べられなかった。すると、虎が釈智聰のまわりをかこみ、食べられなくなって十日が経った。聰が「私の命はもう少して絶えるでしょうから、あなたがたが食べてもいいのです。」と言うと、虎は「天地が創造されてより、そのような道理がありま

21) 訳出するにあたっては、赤沼智善・西尾京雄訳『国訳一切經 本縁部十一』（大東出版、1930年）所収『生經』「第六、佛、野雞を説く經」を参考にした。

22) 中村元・福永光司他『岩波 仏教辞典』（第二版）（岩波書店、2002年）263頁、「偈」の項。

23) CBETA (T50, no. 2060, p. 595a28-b19)、2022年10月25日閲覧。

しょうか。」と言った。その後、一人の老人が聡に、船に乗るようにすすめると、四頭の虎も涙を流した。聡が四頭の虎とともに長江を渡り終えと、船と老人の姿は消えていた。聡は棲霞寺で虎とともに修行に励み、なにか凶事があると、虎が吼えて知らせた。聡は、揚州の信者たちを集めて米社をつくらせ、道俗や禽獣を問わず、たすけた。聡が九十九で遷化すると、道俗問わず哀悼慟哭した。(大意)

虎が高僧の前で、ものを言ったり、涙を流したりする。猛獣である虎が人間のようにふるまうことは、高僧の徳、ひいては仏教による奇跡として述べられる。

これと同じ内容のことは『太平広記』に卷一〇九「釈智聡」(出『唐高僧伝』)として収録されている。そこでは虎がものを言う場面を「虎發言曰「造天立地、無有此理。」」のように表記している²⁴⁾。この「忽」の字があることからわかるように、虎がものを言うことに対して、より驚きの念が込められている。たとえ同一の内容であっても『太平広記』所収説話のほうが、動物がものを言うことを驚くべきこととしてとらえているといえるだろう。

おわりに

文言系説話であっても、時代がくだると次のような例が出てくる。明・謝良撰『古今説海』²⁵⁾所収「中山狼伝」²⁶⁾を引く。

24) 『法苑珠林』卷六十五にも釈智聡のことが載る。そこにも『太平広記』同様、「忽」の字がある。

25) 明・謝良撰・嚴一萍選輯『古今説海』(百部叢書集成)(芸文印書館、1966年)(明嘉靖陸楫輯本)に拠る。

26) 「中山狼伝」の作者と成立年代については、唐・姚合、宋・謝良、明・馬忠鈴の三説がある。ここでは、范志新「關於《中山狼伝》的兩個問題」(江蘇省社会科学院発行『明清小説研究』号数不明、1988年所収)の説に従い、明・馬忠鈴の作とみなすこととする。

趙簡子大獵於中山、虞人導前、嬖奚驂右、捷禽驚獸應弦、而倒者不可勝數。有狼當道、人立而啼。簡子怒、唾手奮髯、援烏號之弓、挾肅慎氏之矢、一發飲羽、狼失聲而遁。簡子怒、驅車逐之、驚塵蔽天、十步之外、不辨人馬。時墨者東郭先生、將北適中山以幹仕、策蹇驢、囊圖書、夙行失道、卒然值之、惶不及避。狼顧而人言曰「先生豈相厄哉。」昔隋侯救蛇而獲珠、蛇固弗靈於狼也。今日之事、何不使我得早處囊中、以延殘喘、異時脫穎而出。先生之恩大矣、敢不努力以效隋侯之蛇。」先生曰「嘻。私汝狼以犯趙孟、禍且不測、敢望報乎。然墨者之道、兼愛爲本、吾固當有以活汝也。」乃出圖書、空囊橐、徐焉實狼其中……趙簡子という狩の名人の前に、狼が二足で立ちふさがり、遠吠えをした。簡子が怒って狼を追うと、途中、東郭先生という人がいた。東郭先生は本を入れた袋を背負っていた。狼は東郭先生に向かって、自分を袋に入れてかくまってくれるならば、自分は先生のために恩を尽くすと言った。東郭先生はぶつぶつ言いながらも、袋から本を出して狼をその中に入れた…。(大意)

獵師に捕まえられた狼が東郭先生に助けを求める場面に狼が人間に話かける。ここでは、夢などの特別な場面は設定されておらず、狼が人間に変身をすることもない。

狼のような、ものを言わない動物が人間と直接会話をするという場面設定は、『莊子』「轍鮒の急」にみえるものの、中国文言系動物説話において、それが主流となることはなかったといえよう。時代が下ると、「中山狼伝」のような、動物と人間が直接会話をする例が見られるようになるのは、白話文学の勃興とも関連するのではないだろうか。

文言系動物説話は文言文で書かれている。それに対して、動物昔話は口承文芸でもある。動物昔話の内容が文字として記録されるにしても、文言文で書かれる際になんらかの改変を受けることになる。また、文言文の形式によって会話の内容を逐一記録することは難しく、口承の内容を記録するには一定の制約があるといえるだろう。

『莊子』などの先秦の寓言、および六朝期の漢訳仏典に、動物がもの言っても怪異とみなされないのは、前者は莊子という人物が口頭で語るという前提であったこと、後者はその内容がジャータカに由来するものであり、非漢語文化圏の文章を翻訳したものだったからではないだろうか。

白話文学の勃興とともに、人間の会話の内容をほぼ実際に語られているのと近い状態で記録することができるようになっていくと、それをヒントとして、動物昔話における「もの言う動物」のような、動物がものを言う場面を文言で記すことの抵抗がなくなったのではないだろうか。文言文では口承の内容を記録するのに一定の制約があるが、白話文であれば口承の内容を直接記録することができるようになる。こうした白話の融通性が、文言文学にも影響を与え、文言において動物がものを言うことへの抵抗が減退し、文言系動物説話にも「もの言う動物」が見られるようになったのだと考えられる。

〔追記〕

本論文は、小山瞳『『太平広記』における「もの言う動物」に関する一考察』（関西大学大学院文学研究科『千里山文学論集』第101号、2021年所収）を基礎に、アジア民間説話学会日本支部2020年度大会（於オンライン・2021年2月21日開催）での口頭発表の内容をさらに発展させて、大幅に改稿したものである。同学会において、ご助言いただいた先生方に感謝申し上げます。